ムギとひが。

雲丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムギとひが。

【Ｎコード】
Ｎ８６６９Ｈ

【作者名】
雲丹

【あらすじ】
穂麦と比嘉は義理の兄妹。天然な穂麦に引っ張られて比嘉はもう大変です。そんなどこか変だけどほのぼのとした二人のある１日の物語です。

「暑い」

いやぁ、実に暑いですねホント。夏ってのは嫌になる。

おっと、申し遅れました。僕、百瀬（ももせ）　比嘉（ひが）。え？　変な名前だって？　ほっとけ。

「おお、ひが兄！　いたのか！」

そしてこのやかましいのが義理の妹、穂麦（ほむぎ）。

何故義理かっていうと、実はコイツ、捨て子だったらしく、孤児院にいたのを親が連れて帰ったらしい。そんで何故か一人暮らししていた僕んとこに送ってきたってわけ。

何故僕のとこに送ってきたのか親に聞いたところ、

「一人暮らししてて寂しいでしょ？」

だそうです。ペットかよ。

そんでなんだかんだで一緒に暮らしてるのです。

「おお、ムギか……暑いな」

「うむ、暑いな！」

「しんどいな」

「うむ、しんどいな！」

「何もしたくないな……」
「うむ、何もしたくないな！」
コイツは本当に無邪気だ。そして天然だ。
「ところでな、ひが兄！」
「ん、何だ」
「うち、したいことがあるんだ！」
「何もしたくないなって言ったばっかなのに……」
「あのな！　あのな！」
「僕の話は無視か。ま、いいや。何？」
「あのな、うちな、公園で遊びたい！」
「そうか、行ってらっしゃい」
「ダメ！」
「え、何が」
「ひが兄も！」
「僕も一緒にこいと言ってるのか？」

「そう！」

「僕に死ねと言ってるのか？」

「そう！　……？　……！　違うそうじゃない！」

何だ今の間。シンキングタイム？

まあいいや。とりあえずコイツは僕を連れて公園に行きたいようだ。さすが小1。外で遊ぶ率高し。

が、僕は大学1年生。外で遊ぶことなんてまずないだろ。

というわけで、却下でーす。

「ムギ、お前、学校の友達と遊んでこいよ」

「やだ」

「……何で？」

「ガキと遊んでるヒマはねぇんだ」

何の受け売りですか？

顔キメてるけど全然かっこよくないですよムギさん。

「お前もガキだろ。とにかく、僕は外に出たくないの」

「なんで？」

「暑いしだるいししんどいし」

「おっさんだから？」
「いや違うけど」
「やーいやーいおっさん」
「おっさん違うわぁぁぁ！」
「おっさんもっさん」
「もっさんて何だぁぁぁ！」
「悔しかったら外出てみろー」
「おっしゃあ、行ってやろうじゃないか！」

まぁ実はこれはいつものパターンで。
別におっさん発言に対してマジで怒ってるわけじゃないから。いや違うから。
なんでも思い通りにいくと考えてはいけないのでこういう方法をとっているのです。
……ホントだよ？

――さて、なんだかんだ言いながら公園にやってきました。

おお、いるいる。小学生。夏休みということもあって、子供がわんさかいるじゃないか。元気だね。
んで、肝心のコイツはというと。

「おおぉぉ」

妙な唸り声をあげていた。

「どうした、早く遊んでこいよ」

「こっ、こっ」

「こっ？」

「公園、すげぇー！」

え？　あ、公園来るの初めてなのか。

「学校よりすげぇー！」

まあ確かに公園のが遊具が多いけど。

「ここ、世界一か！？」

「違うだろ」

「世界一はもっとスゴいか！？」

「そりゃなぁ」

「世界ってすげぇー！」

うんうん。どこで感動してんだよ。

「ところでムギ、お前、公園で何がしたかったんだ？」

そう言うとムギはハッとしてこっちを向いた。

「あのな、うちな」

「ん？」

「あの……あれ……」

その指の先を見ると……あ、あれか。

「ブランコな」

「そう！　ブランク！」

「ブランコな」

「ブランチ！」

「ブランコな」

「ブランド！」

「ブランコな」

「ブラジル！」
「ブランコォォォ！」
「ブラジャ……」
「くぉらあああぁぁ！」
「うあああぁぁ！」
バタバタ走るムギをバタバタと追いかける。
するといつの間にか、周りの子供も集まってきていた。
「鬼ごっこ？　僕たちも混ぜて！」
「いや、鬼ごっこじゃ……」
「よし！　鬼ごっこやるぞー！」
「えええええ！？」
というわけで、鬼ごっこが始まってしまいました。
総括すると。
死にました。
小学生があんなに足が速いとは。
そして僕がこんなに体力がなくなっているとは。

そして何より。
ムギがあんなに運動音痴だったとは！
なんかものすごい活発だから運動神経良いんだと勝手に思っていたんだが……。
一緒に住み始めて４ヶ月。
この穂麦という少女には、まだ知らない所が多すぎる、かな。

――さてさて。なんとか帰宅してきたわけなんですが。

「なっははーい」

ムギはえらい元気です。僕とは正反対で。

「なぁなぁ、ひが兄！」

「なんだ？」

「夕飯、カレーがいい！」

やっぱしこれか。
ここのご飯はいつも僕が作っている。ムギに作らせるわけにもいかないし、もともと僕が料理好きってのも重なって。
まぁそんなレパートリーはないが、なかなか上手いと自分では思っている。
そしてレパートリーの少ない僕の得意料理の一つが、カレー。す

ごくありふれているが、だからこそ美味しくするのは難しいのだ、と自分では勝手に思っている。
でも残念ながら今日はその日ではないんですよね。

「今日はパスタだ」

「ぱす……太？」

なんか違う。何かはわからないが何かが違う気がする……！

「ホラ、あれだよ、麺」

「ｍｅｎ？」

何が違う！？　何か違うだろう！

「今日はミートソースだから、トマトとか乗ってる感じの」

「『トマトトカ』って何……？」

ああ、伝わらない。

でもまあ料理を出せばわかるんだろう。

そんでまたニコニコしながら食べて、テレビ見たり暴れたりして大笑いするんだろう。

そんな毎日がずっと続いてほしい。

そう思った今日この頃でした。

（後書き）

読んで下さり、ありがとうございました。

この作品は、長編にしようかな、とも思っている作品です。一話完結で、ほのぼのとした物語を書いていきたいと思っています。

もしよろしければ、感想・評価など頂けると有難いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8669h/

ムギとひが。

2010年10月22日00時35分発行